

A43171 江河健太郎

要約

本研究は、過去にいじめの被害を受けていることに対して、整理がついていると自覚している学生を対象に面接を実施し、その心的改善(整理)過程を調査することが目的である。

事例 1 に関して。いじめ自体は小学校の一回限りで、授業中に泣くという結果もあり、当日のうちに教師の介入によって解決している。しかし、人の視線が気になるといったトラウマも抱えることにもなっており、いじめを楽観視できない現実を証明している。整理に関しては、本人がさほど気にすることはなかったため、トラウマの件はあるが、加害者側とも確執が生まれたわけでもなく、保健室という居心地のいい居場所を知るきっかけといった程度のものであった。

事例 2 に関して。中学校の折、数人から口頭でのいじめを受け登校拒否にまで追いやられている。結果、事態に気づいた教師の介入によっていじめ自体は解決するも、人間不信といった深刻な影響を残す。高校入学後、空手部に入部したことで転機を迎える。生き方の違う先輩に影響を受け、それまでの思想に変化を受け、整理に通じた。現状でも影響は残っているが、時間の経過により、穏やかではあるが改善の傾向を示している。

事例 3 に関して。唯一の女性ではある。転校後、加害者 X に目をつけられ、周囲も加担し集団で無視するようになったため、登校拒否に陥る。復帰後もいじめは続き、加害者を避けるためにバレー部へ所属したが、これが心の支えとなり、この頃ようやく教師の介入でいじめは一応の解決となる。加害者との関係に改善はなく、中学校も一緒だったが、手のひらを返してきた。はっきりと拒否を示したことで以

後、関わることはなくなる。中学校以降もバレーが心の支えであったが、大学における人間関係の問題でバレーが嫌いになり、その代わりとなることを見つけている。加害者への恨みは深く、整理に関しては時間による改善が大きい。大学で信頼できる友人との出会いにより、心理面でも改善が見られた。また、加害者への恨みは消えないまでも、意識に上らなくなってきた。

事例 4 に関して。小学校 5 年間、仲間はずれといった目に合うも、ある時、加害者に反撃したことで環境は改善していく。ただし、他人を信用できないといった影響を受ける結果ともなる。高校にて、ある友人との出会いで生き様に感銘を受け、目立つことを嫌っていた点がなくなり、内包していた自分を解放することとなる。

事例 5 に関して。幼稚園の頃より近所の加害者にいじめを受け、それが中学校まで続いている。それまでも問題教師を担任にもったり、いじめを訴えても改善せず、親が加害者を注意したことで加害者の親が乗り込んでくるといった問題もなっており、大人への不信を構築することとなる。中学 2 年にて、あるきっかけから加害者と立場が逆転するも、それに追随する周囲の反応に人間不信となる。中学 3 年での担任がまともであったおかげで大人への不信は和らぐも、高校でも違ういじめにあう。根深い悪影響によって自信の喪失や対人恐怖といった問題を抱えていく結果となる。大学にてようやくまともな学生生活を送れたこと、初めてじっくりと話せる相手ができることで、回復に向かいはしており、一応の整理はついている。しかし、悪影響は後を引いており、問題は残っている。

総合考察では、6 つの要点ごとに分けて、いじめ発見の難しさ、環境作りの未完成さ等を指摘しつつ、その中で、どのように整理がつい

たかを総合的に見て、共通性等を踏まえてまとめている。